

TO BE OR NOT TO BE?

あるか、ないか？

150 年間隠されてきた知識

クリストファー・バード著

1991 年

ネキサスマガジン 1992 年 4 月

多形態の微生物有機体の神秘

最初の道への歩み：

ウィルヘルム・ライヒのバイオン

2 番目の道への歩み：

ロイヤル・レイモンドライフと「ユニバーサル」顕微鏡

3 番目の道

ガストン・ネサンとソマチッド

4 番目の道：

ビーチャブと MICROZYMAS

5 番目の道：

ガンサー-ENDERLEIN と細菌のライフサイクル

結論の代わりに：

道は、前に進む

「科学的なうその中心を発見することは世界観の変化に関係する。

科学的発見は、社会の中でだけ可能で、市民に真実を追求する自由を与えることは、どこに向かうかわからないが、真実への異なる経路の追及へ者の、尊敬がうまれる」、ジョン・ボラーニ、カナダのノーベル賞受賞者（化学）；

卒業歴、カナダ、モントリオールのマギル大学、1990 年 6 月

多形態の微生物有機体の神秘

ここから書くことは、一群の勇敢で異端的な知的探求者の仰天するほどの研究結果の概要を伝える試みである。

それは、生命で最も小さな形を報告している。

1世紀以上前にされたこれらの調査結果をそのまま信じるのは困難である。

その時代の主な微生物学の保守的な（R1）全ての思想家と「オピニオン・メーカー」によって一貫して無視され、沈黙の中で検閲されるか、ずっと抑圧されてきた。

友人または恋人のように、歓迎の興奮と手を開いて歓呼で迎えられる代わりに、驚くべき発見は、敵意で迎えられた。

彼らは異常な違反者または詐称師と言われただけである。

多次元の広大なパノラマを提示しようとするれば、郵便切手を多数張るほど、分厚い原稿を書かなければいけない。

または、ドラマの上演を一幕2、3分の時間にして、一時間に減らすことは出来る。

得られた資料はその部分だけで、他の情報には関係しない。全体は見渡せない。

しかも、問題に関する本を得るのは難しい。

簡単にアクセスできず、普通の文献情報源でも参照文に引用されることはまれである。

他方、興味を引く物語の主人公はたいてい、完全に、空間も、時間もお互い、分離されている。

彼らと彼らは平行に研究しており、従ってその研究は彼らの潜在的同僚と自然な協力者にしばしば知られてはいなかった。

彼らが冒険家であったので、彼ら自身が未知の領域で、たった一人の探検家と思っていた。

実は同じ未知の分野のいろいろな部分をこれら全員が切り開こうとしていた。

さらに、すでに言ったように、これらの多くの知的「コロンブス」による「新しい世界」の発見の報告は歓迎されなかった。「旧世界」の地図製作者がすでに彼らの地図を作っており、それで納得していた。

したがって、この領域の地図はおおまかで、最悪の場合、存在せず、進入した部外者は仏教徒の言ったことだとして記憶されるほどだった。

「唯一の道は、歩くことによってやっと切り開かれられたものだった」、そして、偶然見つけたとしても、彼らが足を踏み入れて見たものは故意に無視された。

そんな理由で、今日私がどのようにこの問題を書くか思ったとき、私は、私自身の探求の話を書くことをただ表面的に賛成して、所詮無視することを考えて、アカデミックなアプローチの形式を避けることにした。

実際、生体の多形態の土地はほとんど知られていず、やっと問題が見えてきたところだ。

この課題を研究している他の者と違って、私は、科学者、研究者または医者でもない、

約20年の間、科学の「最前線」をさまよっていた作家である。

あなたのうち誰かが運命のいたずらで同じように意外な展開に駆り立てられたならば、同じように9つの異なる道を探求のために歩くことが必要なことを私は、確かめた。

それでも、昔から言われているように「全ての道はローマに通じている」のだ。

1

最初の道への歩み：

ウィルヘルム・ライヒとバイオン

私はその時にはそうと思わななかつたが、それは生体の多形態の世界に、最初に目を開かせた。

1969年にそれは来た。

海外記者としての任務からアメリカ合衆国に戻った後に、私は、作家として認められていた、ピーター・トムプキンズによって、「異端」の科学者（故ウィルヘルム・ライヒ博士。）の人生と研究に関して伝記を書くのを助けるよう求められた。

新しい考えと発明を発展させることを恐れない革新者の性質によって「異端的」と考えられたとするならば、正規の教育と権威ある者達の研究内容の手垢がついていない、その専門用語「T」はライヒにはかえって使い勝手がよかった。

精神分析のフロイドの被保護者となり、その指導的協力者としての刻印を最初に受けた後に、彼は、独立した経歴を再開するために、国際的な精神分析運動と急に決別し、今日では、生物物理学と呼ばれている研究に入った。

彼が1930年代半ばにフロイトの「群れ」から脱退したとき、大部分の彼の同僚は彼の恨み重なる敵になった。

中央ヨーロッパからノルウェーに追放され、彼は特別なレンズを備えた変わった顕微鏡で研究し始めた。

それによって、生きている生体を拡大して研究することができた。

その顕微鏡は彼の時代の普通の顕微鏡で達成できる倍率の2倍以上、通常の大きさの、2-3000倍まで拡大した。

「小胞」は、彼の驚異的な発見の一つだった。

浮囊のような囊を含んでいる非常に小さい流体が、干し草と他の物質（例えば動物組織、地球と石炭）の輸液に表示された。

かなりの回数実験したあと、その間に、彼は小胞の総数が著しく増加したことに注目した。

それは培養されることができた

それらを含む標本を沸騰させてみると、彼はその、奇妙な形態が「移行性」であるということを見つけた。それは「生命があるもの」と、「生命のない不活性なもの」との中間のものと結論を出した。

これはこれまで認められていない生命の基本的段階で、彼は **Bions.(1)** という名前を与えた：他の生命科学者は言うまでもないが、大部分の微生物学者も、ライヒの見つけた新しい生物を、まるで彼らの前にウォルト・ディズニーの映画「ファンタジア」の登場人物がまっすぐに

て来たように見た。

もし本当ならば、彼らは突然のショックに卒倒しそうだった。

ライヒが栄養を含む培養基の上に彼のボイルした標本のいくつかを注いだ時、培養菌は独特な形態のバクテリアとアメーバを生み出し始めた。少なくともよく知られたバクテリアとアメーバと同類の生命の形態をつくった。

もちろん新しく発生した「微小生物」の可能性があった。

—Leuwenhockのような、顕微鏡の発明者は、最初にそれらを見たとき—培養基の殺菌が不完全だったか、または周囲の大气から培養菌が侵入したんだと言った。

しかしライヒは彼の生物個体培養菌を過熱しこれらの理由を排除し、表面上「死んでいる」混合物が前より高い量の微生物の形態を発生させるのを確認した。

更にこれは、バイオンが、命の前段階にあるもので、死によって破壊できないエランビタルの具体例だという結論に導いた。これはライヒが「オルゴン」と言った生命エネルギーである。

この新しい「生命エネルギー」の確認は、以前からエレンビイタルを仮定していた、フランスの哲学者アンリ・ベルクソン、またはアリストテレスから専門語を借用して、エンテレヒーと言ったドイツの生物学者、H・ドリーシュのような、「生氣論の理論」を抹殺しようとしていた生物学者を怒らせる、明らかに異様な発見であった。

生物学は、ますます冷徹な物理的特性の理論で支配されつつあった。

いずれも、「第一の創造者」または「生命の力」のような「神秘的な」概念を、断固として拒絶していた。

したがって、研究方針を決めるには「科学アカデミーの仲間内での、最初の許可に忠実であることが必要だった。」彼のすべての発表は、正統派が驚くような、または科学の原理を訂正する」ような、すでにそれほど異端的で、ひとりよがりのもではなかった。

ライヒは更に微生物の中にバイオン組織を見つけることもでき、人の血液から培養することもできていた。今でもそうだが、人の血液は無菌であると考えられている。（これは医学部で今もなお教えられていて、変わらない教義である）

彼は次々に、ガンに苦しんでいる人から血液サンプルを得て調べた。

彼はその死に至らしめる病気のプロセスに関係したとても小さな細菌の形を見た。

彼は、それらに T-細菌と名前をつけた。トッドの頭文字 T をとって名づけられた。

その言葉はドイツ人のライヒの国では、「死を意味していた。」

それは、ライヒにはそのように思えた。

癌に侵された体には説明のできない何かが、あった。

豊かな生命力を放散している生物個体に退化が生じると、致死的な T-bacilli が発展する。

彼はこれらの「死のバクテリア」を健康な人々の排出物にも発見したので、彼は、そう仮定した。これらは、ガンを生じる原因にもなる粒子であった。

ガンにかかる可能性のある性質は、腐敗に対する生物学的抵抗のレベルで測定された。

この事は、私の心にひっかかって、このたった一つの疑問の答えを求めて長い年月をかけた、旅に導いた。

私は、ライヒを通して、ガンと他の変性疾患と多形態の細菌学との関係を調べ始めた。

私は、それを求め、この分野で働いているパイオニア的な研究者が、ガンの状態に関連する微生物を発見したことを後で見つけた。

—各々の研究者は、これについて何種類もの「バベルの塔」をつくって、自分の特別な命名法で名前をつけた。それを宇宙人の形態として見る代わりに、「警告のサイン」または「警告灯」として、つまり、初期の疾病状態の指標として、病気の原因として、それらを認識した。

この議論の中心的な問題は、したがって、以下の通りである。

「常時存在するものでないならば、しばしば、組織体に出現する細菌は、少なくとも病気の原因というより、むしろ病気の結果出てきたとは言えないか？」

これらの細菌は病気の原因にもなり、病気の結果出てくることもあるわけで、両方であるだろう。

ライヒの人生は、悲劇的に終わった。

彼の発見は権益を持つものに衝撃と痛みを与え、特に一般的な病気と癌の病理学における医科の神聖なドグマを疑ったために、彼は意地悪な、強烈な攻撃を受けた。

このそびえ立つ（時にはつむじまがりの）科学者の物語は、終わった。

彼は法廷で審理され、刑を宣告され、1964年にアメリカ連邦政府の刑務所で死んだ。

これを我々の自由なアメリカ人の共和国は命令した。

買うことができたライヒの出版物のすべては、—個人的に印刷された雑誌（*Orgonomy* ジャーナル）を含めて—ニューヨーク市の焼却炉で燃やされた。

ドイツのナチ国家が、ライヒの既存の出版物の全てをベルリン中心部（R3）で、巨大な薪の上に積んで点火するよう命令したその20年未満の後に、そのアメリカの命令は、出された。



2 番目の道の歩み：

ロイヤル・レイモンドライフと「ユニバーサル」顕微鏡

多くの原因のため、我々が予定していたライヒの伝記は書かれることはなかった（R4）。

それでも、研究のために使用した2年間は、無駄にならなかった。ライヒを詮索する機会を通して最初に、不思議の国のアリスが落ちたような穴、あるいは、鏡を通して、様々なスリルに富んだ、問題の経験をし、研究に魅了された。

(科学的な判断からみて「絶対ありえないような」白が黒になるような経験であった)
科学教育を受け、それを長く受け入れるための訓練をし、一体となっていたので、異端であるといわれた彼らが「逆に正統的だった」ので、当惑した。

研究された世界を身近に見ることで、私は実際にそれらが、「ある」ことを確信した。

私は私の道に沿って進み、また他の多くの「メモ」を見つけ出し、それでもそれは「否定的なもの」とされたが、それは確かに存在した！

ただ特に1つの疑問が、くすぶっていた：

何んで彼らは認めず、新しい発見を阻止したのか？

これらの研究者、正統的な科学的意見に固執する権威ある者達は「一般に認められた知識」を「確認し」、彼らの小さな世界に閉じこもり変えることは何故できないのか？(ドクター・ジョン Polanyi のことばで言えば、彼らは革新的な考え、または「先端知識」を彼らの「世界観」に組み入れるよう調整している)

「知識の最高権威」が、決定する領域で、「未知の」事は、なぜ興奮で受け入れられる代わりに、しばしば非難され「幻影的である」とか、「ファンタジー」としてタブーにされるのか？

1965年に、私はある論文に出くわした

それは、私の興味を十二分に引きつけた。1944年に、出版されたものであった。

それは1冊でなく、2冊の評判の高い雑誌でワシントン D.C.のスマソニアン学会のものとフィラデルフィアのフランクリン研究所のものであった。

その3分の1は、アメリカのラジオ社によって売り出された新しい電子顕微鏡についての記事であった。

他の3分の2は同じ偉大な成果として「ユニバーサル顕微鏡」を紹介していた。

それは、カリフォルニアの独学者(ロイヤルレイモンドライフ)によって設計され、1920年から発展し改良されてきた。

電子顕微鏡は優れた解像法で500,000倍を上回る倍率を達成することができるが、その放射線が対象となる生命を殺したので、生物を調べることができないということを私は知った。しかし、この論文が心から断言したように、ライフの方法は生きた物質を視ることが可能だった。

優れた解像方法(R5)で少なくとも60,000倍に到達するという、聞いたことがないような倍率であった。この驚異的な装置で、ライフは病人の血液の微生物を簡単に視ることが出来た。微生物はいろいろな状況の下で、他の形態へと一見奇跡的に、変形した。

それは多数の蝶に変形していく毛虫のようであり、その数はガストン・ネサン'のソマチッドサイクルと同じ全部で16の変化の過程があった。

彼は、1人でその、結論に達した。両者は互いに離れて、時間も前後して、独立して研究していた。体の内部の状態に従い、微生物は現れた。

それは、ライフの意見では、疾病の原因ではなく、疾病状態の結果であった。

その結論は、私がハーヴァードで一般生物学で 4 年間のコースの間、細菌学と病気について得た情報をすべて完全に、ひっくり返した。

私は、ライヒのバイオンの研究の間に、私が読み、そして得た情報を思い出すことで、ライフの情報をそのまま、信じる事ができた。

私は、著作をやめ (R6 クリストファーバード著「神の手 ダウジングの 500 年の歴史」のこと) 私は、すべてを追跡しようとして国立医学図書館で 2 ヶ月を使って、探し続けた。

私は、ライフと、彼のスーパー顕微鏡の存在を確かめた。

この問題はだれも注目しないだけでなく、ライフの顕微鏡自体が地球の表面から消えたかのようにだった。

私のこの実を結ばなかった調査の物語はどこかほかに書くことにする。(3)

ここでは、私は簡単に言う。

私の図書館での研究は、1930 年から今までの数十年間に、すべて忘れられただけでなく、学校の微生物学者はまったく認識が無いとまでは言えないとしても、ほぼ永久的に、その形態を認識するにはほど遠い状態で、それを正論として主張してきたことを示していた。

培養菌の正しい発生条件の下で、このバクテリアは生じることが可能だった。

そして微生物をブロックするのが可能なフィルタでも通り過ぎることができるような、ウイルスより十分小さな形にこれは変化する。

バクテリアはフィルターを絶対通過できないと考える「濾過不可能主義者」として知られる保守的な細菌学者の陣営への鋭い反対のため、これらの反乱軍は、バクテリアはフィルターを通過できると考える濾過可能主義者として知られていた。

この学説の支持者で最も初期の 1 人は、スウェーデンのエルンスト・ベルンハルト Almquist であった。北極探検家でもあった彼は離れた島に住み、シベリアの北の海岸は、彼の名をとって名づけられた。

Almquist は、フランス、イタリア、ドイツ、ロシアと米国や、おそらく他の国の研究者と同じように、彼の研究所で何百もの多様態のバクテリアについての所見を得ていた。

1922 年に、Almquist は、20 年間の長い研究の結果、「一つの細菌の、完璧なライフサイクルとさらに種の種類を、誰も全て知ることができない。そう思うことはたんに仮説である」という結論に達した。

微生物学的な世界でライフの顕微鏡の発見が放った騒動は、彼のその後の電磁気を基礎にしたガンと、他の病気に対する治療法と同様に、ライヒのように、米国の医者当局によって法廷で審理される。

法廷は、非常に敏感な発明者にひどい外傷となったことが証明される。

それは最初ライフを神経衰弱にさせ、そしてアルコール中毒にさせた。(R7)

2 つの顕微鏡 (電子と「ユニバーサル顕微鏡」) の対立の結末は私の心を苦しませ、それ以来ずっとその疑問は継続した。そして、哲学的問いは、絶え間なく私の心に穴をあけた：その疑問は、どのようなものであったか、

最初の電子顕微鏡の装置は不活性な生命のない物質だけを見ることができ、それは、世界の研究所で一般的に採用された。

2 番目のライフの装置は、不確定な状態で動き、息をしている、生命のある生体を見ることが出来るのか？

一人の科学者の成功と勝利と、その嘆かわしい終り方の問題は、生命を解明しようとしている 20 世紀の生命科学の基本的な問題に関係すると、言わなければならないのではないのか？ 疑問を反芻している間に、その疑問はもう 2、3 の事実をつけ加わえてくれた。

これは 2 人—または 3 人の科学的な巨人を陥しいれた「科学の政策」のことで、それに基づいて類推するならば、法廷につれ出された、顕微鏡検査の自己訓練をへた癌学者として専門家であったガストン・ネサンも含まれるのではないのか？

どうして全て 3 人の発見が偽で役に立たないものとして「インデックス」をつけられたのか？

それらの全て 3 人がアメリカ合衆国、フランスと多くの他の国で詐欺師とくわせ者として非難される理由を共通のことから説明可能になるのではないのか？

これらの疑問に対する答えを考えるために、沈黙の時間をとることにしよう。(R8)

3 番目の道への歩み：

ガストン・ネサンとソマチッド

ライヒに最初に案内されたところから、ライフにいき、次の驚くべき私の足跡は、アメリカのヴァーモント州の北にある、カナダのフランス語圏のケベック州のロックフォレストの小さな村 L'Estrie 英語では東部居住区と呼ばれるところに、私を連れて行った。

私は、ウィルヘルムライヒ博士の娘エヴァ・ライヒによってガストン・ネサンの情報を得た。私の最初の出会と、12 年間の協力の話はネサンと私の本の最初の章で話したので、私はここで繰り返さない。

私がここで、言うべきことは、次のことである。

私にライヒは多形態の微生物学の世界の研究について最初にそのドアを開け、ライヒの研究は、大いにそれを広げたと言うならば、ネサンとの遭遇の結果はそれを越えて私に全ての地平線の視界を与えた。

ピーター・トムプキンズから研究のために、ライヒの資料のはいった小型トランクを手渡された時から 10 年後の 1979 年に、私は最初にガストン・ネサン会うため訪問した。

その次の 10 年間で、私自身の経験を通して、友人そして、特にガストン・ネサンと彼の妻と過ごした数百時間の援助を通して私は様々な情報を得た。

彼の魅力的な生命の研究で発見した多くのことは、私の本で伝えた。(1991 年 2 月に「完全なる治癒」を出版)

ネサンはその研究の結果多くの波乱を経験したことを学んだ。

時間が経ったが、肝心な1つのことは、私にとって予想もできない衝撃的なことだった。それは多数の科学的に訓練された人々はネサンの顕微鏡によって見ていたものを受け入れるか、信じるには、無能だったことだった。

刺激的で真新しい、ソマチックの形態を認める代わりに、彼らは単にそれらを人工の加工品として受け入れなかった。

そして、自然に存在せず、何か誤って持ち出されたものとした。」(R9)。

そのような信条が生れる一番の源泉を数秒で全て言い尽くすことができる。

最も権威主義的ないわゆる「有能な」研究者の心には、彼らの地位を支持してくれる者の「確実性」の基準から見て、認めるにはほど遠い問題だとして通り過ぎる。

そのような全ての研究者が—それは膨大な数の大衆でもあるが—一度はかつて聞いたことがあるとしても忘れられた、ライヒが科学的研究のために言った言葉を書いておこう：

「特に確定的に話されたことを自動的に信じないでください、あなた自身の目で観察することによって、何かを納得してください。ある新しい事実を察知したあと、完全に説明されるまで、その点を疎かにしないでください」(強調を加えた)

この点で、警句(「百聞は一見にしかず」)は必ずしも正しいわけではなく、逆の場合もある：

「一见は百聞にしかず」である。

1980年代中頃ネサン'に関係していたその間に、私はにヨーロッパにとんだ。

我々は、スウェーデンの医者(エリク・エンビィ博士)に会わせてもらった。

彼はこの分野で、最も早く、そして、最も優秀な、多形態の微生物研究の分野の先駆的研究者の1人と研究した経験があった。

この先駆的研究者はドイツの動物学者 Enderlein だった。

我々は、2、3時間は、話した。

Enby の話す英語は言葉の障壁が、あったため会話は止まった。そして、先駆的研究者 Enderlein の本は、ドイツ語だった。

私が伝えられず、読めもしない言語だった。そのため私はドイツの科学者が苦労した少なくとも 1990 年までには知られていなかった未知の分野の部分に入り込むことができなかった。

ネサンによって得られ、発見された山脈の頂点は、私のネサンについての本の第1部で書いた。

振り返ってみれば、この分野の、「パッチワーク・キルト」の全ての図柄、または1つ1つの部分の発見は孤独な探求者の熱意によって得られている。

彼がソマチッドと呼ぶこの上ない発見は、それを形をなして見えるようにしただけでなく、このほとんど破壊できない、この小さな形の生命の起源といえるものが、変化してゆくサイクルを、全てたどって明らかにしたことだったと言える。しかも、何と、実験を通して、それは「DNA 前駆」物質のようなまねをすることを確かめた。(R10)

ネサンがした他の全てのことに加えて、このようなことも含めて、多くの疑問が出てくる。変性疾患の緩和のための、将来性あるアプローチの発展を含めて、生命の起原については、ミステリーで隠され嘘で覆われており、混乱を解決するために誰も、間近までいけなかった。今もなおそれは混乱し続け、それは長い間、科学を混乱させ続けた。

私は、「近く」にいくための資格を得た。

私の次の足跡は、ねじれた評価がなければこの 1 世紀の間に、このもつれを解決していたかもしれないもう一人の稀有の天才であるフランスの科学者に、敢然と立ち向かうことになった。

4 番目の道への歩み：

ベシアンとミクロジマス (MICROZYMAS)

私が薬剤師、マリー-Nonclercq、に会ったのは 1984 年のフランスであった。

彼女は専門職を遂行した後、

「科学者アントワン・ベシアン、1816 年-1908 年—その研究の独創性と生産性」(4)という題の、受賞した博士論文を書くため、拍車をかけていた：

微生物学の歴史でライフの大部分の研究記録と一緒に顕微鏡の消失は失われた 1 章を構成していたが、Nonclercq が資料から再構成した事実も、微生物学の歴史で、失われた 1 章であった。

再び偶然の出来事によって、私は失われていた情報を見つけ出した。

2 人の科学的な巨人の間の論争に関係するその過程は、長い間かかって記憶によって掃き集められた。

同時代の科学者は、それについてはほとんど何も知らなかった。

敵の 1 人は、ベシアンであった。

彼の強敵は、世界的に有名な L・パスツールであった。

その名前は、世界中で、研究所の楯に刻まれている。

論争は、微生物が介在する病気の起源についての、対立した見方であった。

Nonclercq はブルターニュの医者を通して、医療の歴史についての、分厚い本に出合った(5) 彼女はその本で、L・パスツールは、彼の臨終の床の上で、クロード・ベルナールの戦い方は正しい..「微生物ではない、その土地の勢いがすべてである」と告白したと書いてあるのを読んだ。

—今でも依然として絶対的真理として祭られている理論の父である彼は、多くの疾患の原因は、細菌によって組織体が侵略されることを、証拠を示して提示したその理論を死ぬ前に撤回していた。

実際には、その役割は、体の内部環境によってしばしば行われる。

いわゆる体内の「土壌」の趨勢がそうさせたとするならば、いろいろな原因の性質が変わり、細菌の成長が内部から助成されたことになる。

パスツールが省略したものは、それであった。

彼の告白は、フランスの指導的生理学者バーナードの、洞察に満ちた声明に関してではなく、何十年もはっきり態度を表明して彼と闘った男 Antoine ベシヤンに対してのものであった。Nonclercq は、史料を念入りに掘り起こして、パスツールがこの論争を科学的な事実に基づかずに勝利していたことをみごとに証明した。

しかも、非常に高度な科学的技術をもつプロフェッショナルな研究者だが今日「広報」と呼ばれている自分を売込むセンスのない退職した、ベシヤンに、強敵パスツールは、打ち勝つことができた。

歴史の裁判官が判定するならば、パスツールの勝利は、ある日、完全にピュロスの勝利であったことが証明される。（「古代ギリシアのエペイロス王で、戦術の天才と謳われたピュロスの故事に由来し、損害が大きく、得るものが少ない勝利」、つまり「割に合わない」勝利であるという意味。）

医学がパスツールの道筋に続くように長い間強制し、少なくとも医学という名目でされた驚異的な損失に関かわったことで、自ら苦しむこととなる。

ベシヤン自身の発見の道筋を、たどると、発酵—錯化合物を比較的単純な物質に分裂させる化学反応—の問題を研究し、彼は生きている人の有機体から、チマーゼと言う一連の「酵素」を分離した

(R11).

それは生体の中で働くカビと呼ばれ、有機物質を崩壊させる真菌様の生長物であった。

ベシヤンは、それらが小さい「粒状化」の堆積によって形をなすのを見た。

チマーゼとの関係のため、彼はそれを、ミクロジマス *microzymas* または「小さい酵素」と呼んだ。ネサンの語彙であるソマチッドの前身である（「小さな組織体」）

(6)

この物語の目的にとって非常に重要なことは、ベシヤンも、ある種の状況の下でこの果粒ソマチッドを見つけていたことだ（それは細胞化したバクテリアに単独で発展する）

したがって、「細胞は、生命の基本的な単位としては、もはや認識することはできず、全くより小さな何かに、それは取り替えられるべきだった。

細胞よりも、多くの数の、ミクロジマス *microzymas* があった。

ベシヤンが最初の哺乳類が地球上に存在していた 6000 万年前の地質学的日付がある石灰岩で確認できたように、それは破壊することができない。

それらを殺害する彼のすべての努力が、実を結ばないことが証明されたので彼は驚いた。

彼は、第 3 の傑作「血液」を書いた、そこで

「私は、ミクロジマス *microzyma* がすべての組織の始まりだと主張することができる。

そして、死んだバクテリアにもミクロジマス *microzymas* は生きている、したがってこれらは、全組織で最高のものであり、類似物のない特別な始原的な、生きた存在である。

.(7).

ミクロジマス **Microzymas** は命プロセスの初めに出現した。たとえば胚珠にあるそれは、卵になったー

そして腐敗している生物形態でもそれは存在しており、ラヴォアジェの不生不滅の化学的法則と同じものが、ベシヤンの生物学的な法則にも完全に、見つけ出された。:

「何も失われず、何も創られず、すべてが、変化するだけ」の状態である:「何も死の餌食にはならず、すべては命の餌食となる」

これは、灰から灰へ、塵から塵」にという古い聖書のフレーズを思い出させる:

血液の最後のページで、ビーチャプはさらに露骨に言う:

「死んだ後、物質がその最初の状態に戻ることは、重要なことである。

それは、生きていた人々の組織にしばし、貸されたただけだった。

生物はミクロジマス **microzymas** でいっぱい、生命の構築に、または病気のために、破壊のために、そして、死のために、これら自身が重要なものを、もたらす。

この多様な結果は同じプロセスによっていることに驚く必要はない。

我々の細胞は「死への過程」に非常に似た「発酵」によって、連続的に破壊されているのが絶えず観察されることができ。ーそしてそれは連続して起こっている。

我々がこれらの現象の核心に深く入りこむならば、我々は、この現象を、本当につまらない活動と言うことはできない。我々は、絶えず腐敗している！」(強調を加えた)

5 番目の道への歩み:

ギュンター**ENDERLEIN** と細菌のライフサイクル

植物の秘密の命」の我々の続編「**Secrets of the Soil** 土壌の秘密」(R12) が出版された 22 年後、1990 年にそれは、あった。その年、私は、ライヒとバイオンの研究を始め、ついにもう一人の研究者の研究結果を手に入れた。

それは微生物の多形態の研究の地平線上にある、山頂の連なりのなかの、ピークの 1 つで、ディテールを明確する研究を確立したことで歴史に残っている。

この問題に関する最初の英語の本によってこの情報を手に入れることが出来た。

第一次世界大戦の間にドイツの動物学者によってこの研究は開始されたと述べている。

ガンサー**Endedein** の発見は本の著者によって「かつて得た最高に重要なもの」として、その研究の価値が書かれている。

Enderlein (1917 年) はバルト海の陸軍病院の細菌学者として働き、「微生物界の全く新しい所見を開き原稿を書き終え、同僚によってそれは歓迎された。

バクテリアの多くの異なる多形態の発達段階を明かにして、示した。

病気とそれらが治癒されてゆくプロセスは、正確に周期的な多形態の変化の法則に拘束されている。

原稿は、1925年に、「バクテリア サイクロジーナ」(バクテリアのライフサイクル)という本にされて発表された。直後にその作者はベルリンの動物学博物館の管理者が約束された。

Enderlein の研究は、ドイツの研究者と同じようにアントワン・ベシヤンにたいへんな信用を与えたことを示唆している。

寄生虫学の創始者で動物学者ロバート・ロイカルト、そしてはるか昔の、1901年に戻ってがん患者の血液に寄生虫がいることを最初に報告したオットー・シュミットを含め、何人かのドイツ人と同様に Enderlein はベシヤンがやり残した所を、取り上げた。

この出会いによって、暗視野顕微鏡の装置で研究することによってのみ、これらを見るのが可能であるという点が、興味の焦点となった。

さらに Enderlein を学んだために、微生物は、形態の変化のサイクルを通して変化が進むことに、たいへん興味を持ったことをここに付け加えよう。

彼の考えでは、無数のバリエーションが可能である。

彼は微生物現象の分類表を見せて「1000の頭をもつ怪物」とした。

彼は相互に有益な共生関係の中で、異なる種類の微生物が組織体の中で通常生きていると明解に断言し、体内環境の厳しい悪化で、これらが疾患を生み出すと言う。(!!)

そして Enderlein は、病気を引き起こすこれらの活動について生命の異常、または「生命のプロセスの欠陥」と言った。

病気を引き起こすという進行中の邪悪な目的が、微生物の部分が原因で達成されるとするだけでは充分ではない。

これらの微生物が生き残るための衝動が、その効果(病気)を引き起こす。微生物が生き残ろうとする衝動が、病気の原因をつくるのに充分必要なものだった!

これらの初期の発達段階では、健全に有益な役割を実行しつつ血液の中で生きている。後になって、彼らは自らを維持するためにその役割を見捨てる。

今日、「バクテリアサイクロジー *Bakterien Cyclogenie*」という本はほとんど知られてなかったが、強い関心をもたれている。

それは第二次世界大戦の前に、研究者によってささやかに国際的に承認された。

ピッツバーグ (1930年のペンシルバニア) で行われた国際的な生物学的議会で明らかに好評で 1939年にニューヨーク市で開催された3回目の微生物学的な議会で、Enderlein の貢献は、栄誉を与えられ認められた。

正統的なドイツの医学コミュニティの強力な部分から、彼のパーソナルな生活を襲撃されたにもかかわらず、Enderlein は医者と微生物研究者 (ウィルヘルム Brehmer 博士) のような 2、3 の勇敢な同僚に強く支えられた。そして、その人はガン細胞の抑制されない悪性の成長の原因のエージェントを確認した」

Enby の本はこれ以外に一多形態理論が隠蔽されていくのと対照的に、微生物は単一形であ

るとする教義がどんな具合に優勢になったか、歴史的見地を私に教えてくれた
(これはロイヤル・レイモンド・ライフについて私が論文を研究している間、私が見落とし
た見方である)。

これを強くなった理由を、パスツール (1822~1895) の影響だけで考えることができず、
ローベルト・コッホ (1843~1910) についても考えないといけなかった。

コッホの「原則」は、微生物研究の「10 戒」のうちの 1 つになっている。

そして、彼の同胞は、自然主義者で植物学者の F・コーン (1828~1898) である。

コーンは、微生物の組織と形態に基づいて、細菌の恒久的タイプを種として厳しく区分し、
これらをグループに分類することを主張した。

そして 20 世紀への変わり目を過ぎて、医薬品を研究するためにドイツに進んだ多くのア
メリカ人にドグマとしてこの考えが根強く教えられ、次々にコーン・コッホの見方は、ア
メリカに持ってこられて、決定的なものなり、反対は許されなかった。

結論の代わりに：

道は、前に続いていく

私がここまで書いてきたものは、多形態の有機体が住むミステリアスな国への個人的な旅
の報告である。

この報告では普通に起きる、不確かなこと、思いもかけないことを、それぞれの道に沿って、
問題を共有できるように、「小刻みに」要点となる情報を書いてきた。

調査した国は、平面的な地図が作成されただけである。

しかし、私の調査の結果、私のナップサックは、スケッチの山で満たされている。

仕事を達成するには時間が必要である。

ある日、私がこの領域の詳細な全ての地図の準備をすることが許されれば本は、形をなし、
この地図は最高のミステリースリラー小説の中で話されるのと同じほど刺激的な物語を簡
単に提供することができる。

すべてにおいて、まだ不足しているものは、その目標への思いである。

そして、思いを高く目標を持ちつづけようとおもう。

多形態の微生物の研究の場は、多くの頑強な研究者の作業で、調査結果が受理され、彼らの
成果が見つけ出された。

—そして、これらは至る所で苦しんでいる病人を治療する物理療法に適用するように案内
した。

Enby's 本博士の最初の章は、「医学的な革命の起源と名付けられた;

その革命は、依然として完全に進行していない。

Enderlein の、本は 65 年前出版され、その結論は、彼の前のベシヤンのように、全体が科
学界によって認知されずにいる。

これは、そうあってはならない。
多くの他の研究者の真実を持ってくるすべての努力が曲げられたわけではないので、
革命を、起してほしい。
たとえば、1927年の、アメリカの微生物学者、フィリップ・ハドリー博士に戻って考える
べきである。
彼は伝染病ジャーナル 312 ページに発表された記事「微生物の崩壊」で、Enderlein の研究
を非常に賞賛した。
これはミシガン大学の衛生学研究所で実施した研究で、基礎が形成された。
この論文でハドリーは先見の明をもって注意した：
Enderlein'の貢献の本当の評価が得られるまで、多分長年かかるでしょう。
一方、我々は、混沌とした状態の細菌の細胞に研究のために秩序を作ろうとした慎重な彼の
試みを手放しで賞賛する。
私は、Enderlein が道を切り開いたと思っているが、少なくとも、前進のラインに、多くの
他の細菌学者が遅かれ早かれ、続くことは確実である」
このことばは 64 年前書かれたが、少数しかハドリーの挑戦に応じる細菌学者はなかった。
その挑戦に応じた 1 人は、ハドリーがこれを書いたわずか 3 年前に生まれた。
我々には、今日、ネサンの存在がある。
研究に献身した人生、そして、隔離された彼は、フランス人として生れ半生を過ごし、残り
の半生は、ケベックで生きた。
彼の選んだ土地で、彼は燃えて、前進した。そして彼より前に、ベシヤン、Enderlein、ラ
イフ、ライヒといった他の多くの研究者によってもたらされた戦いのたいまつを点灯しつ
づけた。
彼は、今まで大事にしてきた匿名性を脱ぎ捨てて、明らかにした。
多数の人に遠くから、あなたがだれであるか、来てほしいと要請されて、彼はシンポジウム
のスポットライトに呼び出された。彼は、証明するために、それを言わなければならなかつ
た。そこで、彼が示したものが何であるかあなたは見たはずだ。
多分、科学的な舞台の中心に、ついに微生物多形態性の研究の場が現れるかどうかに関係な
く、彼の発見は、成就している。
すぐにそれは科学界が認めるのだろうか？「あるかないか？」はハムレットの劇中の、問
いである。
だが、われわれは、ガストン・ネサンの研究の成就と彼の勝利をたたえようではないか。

著者クリストファーバーードについて

土壌の秘密：

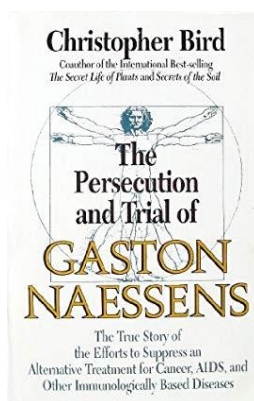
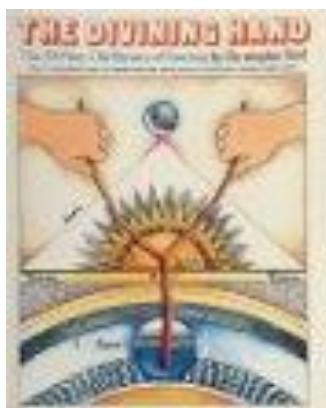
わが惑星地球の新しい解決法

Secrets of the Soil

New Solutions for Restoring Our Planet

植物の神秘

The Secret Life of Plants



神の手---ダウジングの 500 年の神秘

The Divining Hand:: The 500 year-old Mystery of Dowsing

完全なる治癒 ガストンネサンの真実

The Persecution and Trial of Gaston Naessens:

The True Story of the Efforts to Suppress an Alternative Treatment for Cancer, AIDS, and Other Immunologically Based Diseases

参照：

R1

orthodox' ということばは ‘、ギリシア語のオルト ort という茎を意味する言葉に由来する
(正確なこと、または正しいことまたはさらにまっすぐなものを意味する)

後の doxa ドクサは (意見) を意味している

後者は動詞 (dokein) から来ている、

(考えられるとか、みられるを意味する)

その語源に由来して、このように、正しい説に思われるか、正しいことになっている意見を暗示しています

R2

他のどの言葉にも翻訳できず、一匹狼の人を意味する

彼のグループ命ずることを拒絶する者、(他のことばでは、) 反対する者
その語源は、一直線に古い西側のカウボーイの文化に由来するということを多くの人は、知りません

このことばはブランド名のないものにあてられた、
または、孤児、子牛の類または子馬、伝統的に、一人だけの特性の持ち主と烙印を押された者と考えられていた

英語の話しことばは、初期のテキサス牧畜業者に恩恵を受けている、

Samuel a Maverick (1809-1810)

サミュエルマーヴァリッカー匹狼 (1809~1810) がいます

その人は、仕方なしに彼の名前がこの語源に由来するため、彼はブランド品を作りませんでした。

R3

ライヒの **bion** 研究の世界の、おそらく唯一の専門家は、バーナード・グラ博士 (生物学的科学の教授) です

最近、モントリオールのマギル大学から引退した。

彼の学生時代に、メインの **Rangeley** の、ライヒの建てた家と研究所である「オルガノン」でライヒと多くの時間一緒に研究活動をした。

グラには研究があります。そして、依然として、命の起源に関連する彼自身の **bion** 研究に関する本は、出版を待っています。

R4 ライヒのプライベートな資料は、彼の財産の理事によって独占的に封をされた。

彼の娘 (エヴァ) は、裁判所の活動を通してそれらの封を切ろうとしましたが出来ませんでした。

R5

ライフの才能は、1 マイル離れたところからナンバープレートの文字および数字を自動的に明らかにすることができるカメラを発明しました！

R6

The Diving Hand:

神の手 :

The 500 Year Old Mystery of Dowsing (E.P.

500 年前のダウジングミステリー (E.P.Dutton, New York, 1979; New Age Publications, North Carolina, 1985.)

ダットン、ニューヨーク、1979;ニュー・エイジ出版物、ノースカロライナ、1985 年)

R7

それはカンザスシティの偶然の会合を通してでした

私は、サンディエゴのライフの研究室アシスタントのうちの 1 人のガレージについて訪問しました

私は荒廃した状態の「ユニバーサル顕微鏡」を見つけ出した
私の記事が出版された結果、長い間、顕微鏡を探していた人々からの多くの電話をもらいました
最高に面白くて熱心な1人は、メリーランド（バッファロー）ニューヨーク州立大学のジョン・ハバード博士でした
その人は、わたしがカリフォルニアから持ってきた RifeI の資料を見るためワシントン D.C.の私の家に来ました。
私は Rife'の人生に関する本を書くことを計画しました、しかし、他のプロジェクトが介入しました。
その本（ガンの治療法は完成した）（Marcus Books, Queensville, Ontario, 1987）は、バリー Lynes によって書かれた。

R8

これらの疑問に対する答えは「ガン産業——医療における政治活動を解明する The Cancer Industry Unravelling the Politics,」 Ralph W.Moss 著（Paragon House, New York, 1989）. を読んでください

R9

ことば「artifact 人工品」は、技術という言葉から生れている、
（動詞 *facere* の中性過去分詞（「つくる」））、または「何かつくられた」
生物学において、「通常存在しない組織または物体を意味している
しかし、いくつかの外面的な作用によってまたは活動によって生み出されている
我々の多くはことばの基本的に意味することを忘れています
「技術」は、「自然の動きを補うか、模倣するか、変えるか、偽造する人間の努力です
ことば（人工品 artifact）の安易な使用によって不当に新しい微細な発見を廃棄させることができることに加えて、これに「含まれた意味」にはある種の策略を暗示しています
偽る、ごまかす、または外へ偽装する、または、詐欺的な動きを約束する、
全て正しいことを知っていたのに、それらの事を行ったネサンの起訴には、この言葉はよく似合います。

R10

ネサンは、ウサギからウサギにソマチッドが移動することを実験しました
それは生きている人と動物の遺伝子の特徴のある変化にあてはまっていた。
そして、特に臓器移植で潜在的におこる、拒否症候群にかかることはなかった。
「私の書いた本の第1部にあります

R11

酵素複合体はイーストと、バクテリアと高等植物で見つけ出される
その発見のため、Bechamp ではなく、ドイツの科学者の信用が、増しました

その人はそのことのための 1907 年に、ノーベル賞を与えられた。

ビーチャプの優先順位を正当化する決定的論文は、1897 年に発表された
チマーゼ zymase ということばは、Bechamp のその問題の最初の研究に関連して、
フランスのリトレ辞書の 1873 年版で見つけ出される

R12

土の神秘「Secrets of the Soil」

, Harpercollins, New York, 1980.

1.これに関するドイツ語で書かれた、ライヒ最初の本、Bione (バイオン Die Bione) が、
1939 年ノルウェーで出版された

この問題の英語版は「ガン Biopathy」で見つけ出される、
(最初のもの 1950 年に出版された)

「The Cancer Biopathy 癌の生物学」1973 年;と、「命の起源と、バイオン実験 The Bion
Experiments」は 1979 年に、ファーラー、シュトラウス、ジルーによって両方とも出版さ
れました

2. 「新しい顕微鏡」

3.

「ライフ顕微鏡で何が起こったのか？

" New Age Journal, Boston, Massachusetts, 197

((また、迫害の中で再版される)

そして、

ガストン・ネサンの裁判、NJ Kramer inc, Tiburon, California, 1991 年, の付録「A」と
して

4. 「Antoine Bechamp, 1816-1908」 L'Homme et le Savant が
本として出版された :

, Originalite et Fecondite de Son Oeuvre, Maloigne, Paris, 1982.

5. Delhoume, Leon, De Claude Bernard a d'Arsonval.

Lib Bailliere et fils, Paris,

1939 年, 595pp

6.

ビーチャプには 2 つの主なる研究がある

seer Les Microzymas, Blilliere, Paris, 1883, 992pages;

and Microzymas et Microbes, Editions Dentu, Paris, 1893, 346 pages.

7. From Le Sang et son deme element anatomique, Paris

1899 年に英訳された

「The Blood and the Third Anatomical Element 血液と第3の解剖学的要素」

by Montague R. Levenson MD., J

モンタギュー R. Levenson 博士著訳 (John Ouseley Limited, London 1912.

1980年において、アラン・カントウェル博士は、ワシントン D.C.の米国議会図書館の本のコレクションでも、米国の図書館でも見つけられないと知らせてきたと報告した

Veritas Press によってその後再版された、

GPO Box 1653, Bundaberg, Qld 1988.

8. :

「隠れた殺人者 ガンサー Enderlein 教授の医学の革命 Hidden Killers: The Revolutionary Medical Discoveries of Professor Gunther Enderlein,」 (Erik Enby 博士著、Sheehan Communications, 1990年)

本は、raum&zeit (私書箱 1508) から得られるでしょう

Mount Vernon, Washington D.C. 98273;

Pb : 2064246025.

9. Bechamp のように Enderlein は、96才まで生きた

(彼は、1968年に死にました)、

1955年に最初に彼が出た雑誌 Akmon で彼の結論の多くは発表された？

10.

1947年、

von Brehmer の本「Siphonospora polymorpha」で、

この研究者は、注意しました

ガンは、血液の pH 数値を測ることによって

その最も初期の形で事前に診断することができる

そして、暗視野顕微鏡の下で大量の桿菌形の siphonospora が現れるのが、見える

raum&zeit, VolZ No.6, 1991.

52 ページから 59 で

(raum&zeit は、優れた隔月の雑誌です

published in the USA.

米国で発表された。

会費は、6冊で US\$75-です :

Dept. S.O., PO Box 1508, Mount Vernon, Washington 98273.

(206)424 6034 - Editor's Office

史上最も偉大な医療上の発見はなぜ隠蔽されてきたのか？

ロイヤル・レイモンド・ライフ・ジュニア

1888年 5月 16日 から- 1971年8月11日まで

1920年代に開発された画期的な顕微鏡が、細菌によるあらゆる病気を治す方法を明らかにするのだろうか？ 無線周波数を用いるこの技術が癌を阻止し、実際に治すことができるのだろうか？ この技術は恐れられているエイズウイルスを阻止し、ライム病、蝶形狼瘡、その他いわゆる「不治の病」が広がるのを押さえることが出来るだろうか？

天才的な科学者であるライフの物語は、魅力的なミステリーに例えることができる。彼はドイツのカール・ザイス光学会社で6年間訓練を受けた。彼はまたアメリカ政府のシークレットサービスでも働いている。彼は強力な顕微鏡を開発し、ウイルスを扱う有益な現象の発見をもたらした。

ライフはティムケン・ローラー・ベアリング会社のティムケン氏から経済的なサポートを得、サンディエゴに研究所をたて、研究を行った。

ライフは癌のような病の治療法を見つけるためには、病の原因となっているウイルスを生きのまま見ることが重要だと考えた。1920年、ライフは非常に先進的な顕微鏡をいくつか設計した。これらは世界で最も強力な顕微鏡で、ウイルスを生きのまま観察することが出来る唯一のものであった。

ライフの顕微鏡は当時の他の顕微鏡を遥かにしのぐ解像度と拡大率を有していた。(今日の顕微鏡でさえしのぐかもしれない)ライフの「ユニバーサル・マイクロスコープ」(1930)の拡大率は31,000倍で、当時の他の顕微鏡の拡大率は 3,000倍にすぎなかった。

ライフの「ユニバーサル・マイクロスコープ」

しかしライフは抜群の拡大率を持つ顕微鏡を作るだけでは 無色のウイルスを見るには不十分であることに気付いた。既存のアニリン染料で 無色のウイルスを着色することはうまく行かなかった。ウイルスはコロイド粒子を吸収するには小さすぎたからである。

ライフは光の異なる周波数によって特定の微生物が自身の共鳴する色で発光することに気付いた。そこで、彼は標本を光によって着色するのに必要な光の周波数(色)を特定する、プリズムを回転させるシステムを開発した。

この光の共鳴効果から推定し、彼は電磁波を用いて実験を行って、それぞれのウイルスにたいしてウイルスが分解・破壊される特定の共鳴周波数があることを発見した。彼は実験室で致死量の病原菌を実験動物に投与し、的確な周波数の電磁エネルギーをその動物に数分間あてることによって、一定数の命を救うことが出来た。したがって1930年より以前に、彼は最初の顕微鏡を作り、病原菌を電氣的に殺すことが出来ることを証明したのである。

この成功は あらゆる細菌による病は人間のであれ 動物のであれ、植物のであれ、即座に苦痛を伴う

ことなく根絶することができることを実証したのである。これは電気治療であり、次世紀のヘルステクノロジーである。人類史上これ以上重要な発見があるだろうか。病が直ることが実質上保証されたのである。(しかも非常に安価で)

この技術の原始的なやり方がある種の白血病の治療に使われている。患者の血液を体内から送り出し、紫外線にあてるのだ。残念なことにはこの AMA(American Medical Association)認可治療は血液細胞が作られる骨髄の治療は行わない。さらに苦痛を伴い、且つ高価な治療法である。ライフのやり方は体全体に内外からアクセスするものであった。ウイルスを感電死させ、不治の病を治すものであった。ライフの方法は全く体に無害で大変安かったのである。

ライフの成功は多くの医者や科学者の注目を集めた。バクテリア学者として有名なアーサー・ケンダル博士は「濾過性ウイルス」バクテリアの一部が隔離されても再生し続けるという「Kミディアム」を作るのに貢献した。

ミルバンク・ジョンソン博士はライフの仕事の強力な支持者であり、ライフとケンダルの栄誉を評して医療分野における30人以上もの著名な人々を集めて夕食会を開いた。

ジョンソン博士はクリニックを設立し、そこでライフは16人の末期ガン患者を周波数装置で治療した。3ヶ月後、5人の医者と アルビン・フォード博士(そのチームの病理学者)は 14名の患者が治癒したと発表した。

ジェームス・クッシュ博士はライフの周波数装置を22年間使い続けた。彼は脚の骨髄炎に悩まされたメキシコ人の少年のケースを報告している。彼は毎週骨を削る作業をしなければならず、しかもそれは多大な痛みを伴ったのだが、周波数装置の治療を開始して2週間後、その少年は完治し、再発することもなかった。

ライフの発見は革命的であった。細菌による病の根絶を約束したのだ。そしてそこにこそ、彼の偉大な発見発明の隠蔽の理由がある。科学者としてのライバル意識や組織の傲慢、AMA(American Medical Association アメリカ医療協会)のワンマンなやり方、製薬会社の利益などが隠蔽に加担した。

しかしながら、1934-1939の間に、ライフの周波数装置を使って多くの医者が癌や他の病を治療した。が最後にはこうした医者達にライフの周波数装置による治療をやめるよう非常に強い圧力がかかり、装置は没収されてしまった。

1939年、ビーム・レイという新しくできた会社で、ライフの装置を商業ベースで売り出そうと 装置の改良するためにライフとともに働いていた一人の技術者が、会社を相手取って訴訟をおこした。この技術者はAMAから多大なバックアップを得ており、引き続き訴訟がライフを衰弱させ結果的にアルコール依存症と鬱症状においやった。こうした功利的な目的のために、ライフの意欲的な研究は終りを告げるのである。

2社の有名なジャーナルがライフの革命的な顕微鏡のことを記事にしている。一つはフランクリン・インスティテュート誌で、1944年2月に「新しい顕微鏡」という記事を発表している。もう一つはスミソニアン・インスティテュートで同じ記事を年間誌に出している。1944年 6月30日である。そして、1945年再販

し、その記事はジョン・クレインの本で読むことができる。

1950年、ジョン・クレインはライフのパートナーとなり、ライフの周波数装置を改良するため、及びライフの業績を文書化するために働いた。1958年、彼は体にじかに装着できる小さな周波数装置を作った。医者達はこの低価格で小型の周波数装置を使い出して成果をあげた。またしても医学界の権力者が圧力や脅しをかけ、小型周波数装置を使うことをやめさせた。クレインの事務所は突然警察の捜索にあい、全ての装置とドキュメント、研究記録などは破棄された。まったくの令状なしの捜索であった。ライフの技術を調査するのに今日のこされている唯一の方法は個人的な研究や実験を通じてのみである。

-----引用終わり-----

ライフは画期的なその顕微鏡を使って血液などを観察した結果、次のような結論を得た。

- ▼細菌は病気を起こす原因ではなく、病気になった結果生じるものである。
- ▼細菌は、体の状態に応じて無害なものから致死性の病原菌に変化する。
- ▼その病原菌は、特定の周波数の光で即座に殺すことができる。
- ▼細菌は生命の基礎単位と考えられているが、実は細胞の中にもっと小さな細胞があり、その小さな細胞の中にさらに小さな細胞がある。このプロセスは顕微鏡の倍率を高くして見ると 16 段階まであり、マイクロ以下の大きさまで一段階ずつ続いている。

こうして小さな細胞が 16 段階に変化することを発見したライフはさらに研究を続け、ついにガンに関する全く新しい理論を打ち出した。それは「ガン細胞にある周波数を持つ光を当てると死滅する」というもので、数々の実験の結果それはガン、結核、腸チフス、ハンセン病、口蹄疫などで効果を示した。ちなみにそれを知ったサンディゴのアーサー・W・エール医学博士がライフの周波数装置を入手してガン患者の治療をしたところ、腫瘍が約十分の一にまで縮小し、再発することはなかった。このように 1920 年代には早くもライフがネサンと同じような成果をあげていた。

酸性化は、現代特有の環境劣化、病根の温床であるにも関わらず、あまりにも理解が薄いのが現状です。

自然環境の基本デザインは、電気的中性。水素イオン指数=phが中性に保たれるように設計されています。人間で言えば、重炭酸ソーダサイクルのような、身体の中性を保つ役割です。それが十分に機能していれば酸性化由来の疾病は起こり得ないのですが、それを上回る酸性化がすすんでいる事実。この事実が示しているのは、人生の6割以上を過ごす居住空間の空気環境の重要性です。

化学兵器サリン、有機リン酸を基材にした多様な農薬は、神経細胞のイオンチャンネルに入り込み、イオン電流=活動電位の伝達経路を塞ぎます。細胞が持つプラス、マイナスのイオンの通り道は高精度な識別センサーを持っています。電気的中性を保つために、特定のイオンだけを通過させ、活動電位を起生したあとに、興奮を沈静する特定のイオンを細胞内に流入させます。サリンや農薬が瞬時に生命を抹殺できるのは、イオンチャンネルのセンサーを狂わせる能力があるからです。本来侵入できないイオンチャンネルに飛び込んだ毒素は、電気的中性を保とうとするイオンの流入を塞ぎます。プラスイオンを排出し、マイナスイオンを取込むことで中性を保つ細胞の機能が損なわれれば、数秒で細胞、細胞群は崩壊します。

サリンは極端な例かも知れません。しかし、一酸化炭素中毒、揮発性の建材から発生するガス、ごくごく微量の放射能、曝露の時間差の問題とは言え、同じことが起こっています。酸性化の問題は毒素だけとは限りません。

体内に残留する特定の酸化物質=タンパク質に嫌気性発酵を促す酵素が、生命体と非生命体の中間に位置するマイクロジマス、あるいはソマトリスを生成します。一般にタンパク質が特化した、ニューロペプチドと言われる物質です。この物質の特徴は、感情=心の有り様に反応し、色やカタチ、幾何学的配列が変化することです。心因性由来の酸性化も疾病の原因となることは明らかです。

たとえ、緩慢であっても、電気的中性条件が偏るリスクは、心理的にも影響を及ぼし、病変発症の端緒となり、代謝毒、生物化学兵器を浴びたに等しい結果を招くことになり得ます。生命の居住する環境が酸性化するリスク。空気環境は分子レベルで還元促進しなければ、根本的な解決にはつながりません。